

ヨーゼフ・シュトラウスのためのニューイヤーコンサート

曲目解説

日本ヨハン・シュトラウス協会
若宮 由美

シュトラウス家の次男ヨーゼフ(1827-80)が、これほどニューイヤーで取りあげられたことがあるでしょうか。2013年の注目はヨーゼフです。技師であった彼は、1853年に兄ヨハン(1825-99)のピンチヒッターとして初めてシュトラウス楽団を指揮し、ワルツ〈最初で最後〉op.1を発表。音楽家になる意志のなかったヨーゼフでしたが、意に反して職業音楽家の道を歩みました。

生誕200年を迎えるのはヴァーグナー(1813-83)とヴェルディ(1813-1901)。そしてオイゲン公(1663-1736)は生誕350年。かつてのオイゲン公の城、シュロス・ホーフでバレエが踊られます。指揮者はオーストリア出身で、ウィーン国立歌劇場音楽監督のフランツ・ウェルザー＝メスト。

第一部

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈スブレット〉op.109

Josef Strauss: *Die Soubrette. Polka schnell*, op.109

スブレットとは「小間使い」の意。オペレッタに登場する「ちゃっかりした小間使い」の役柄を指します。《こうもり》(1874)のアデーレがまさにスブレット。しかし、この曲は1861年8月初演で、ウィーンでオペレッタが大流行する以前に作られました。躍動感あふれるポルカは聴く者を楽しい気分させ、演奏会への期待を高めることでしょう。

ヨハン・シュトラウス2世：〈キス・ワルツ〉op.400

Johann Strauss Sohn: *Kuß-Walzer*. op.400

1878年4月に最初の年上妻を亡くしたヨハン2世は、翌月2度目の結婚をします。再婚したヨハンは、1881年11月にオペレッタ《愉快な戦争》を初演。翌年1月の宮廷舞踏会で、オペレッタのヒット・メドレーというべき〈キス・ワルツ〉を披露します。「愛する妻アメリカへ」という献辞にもかかわらず、蜜月は続かず、25歳年下の妻はすぐに家をでます。

ヨーゼフ・シュトラウス：〈劇場カドリーユ〉op.213

Josef Strauss: *Theater-Quadrille*. op.213

カドリーユは6曲の小曲から構成され、舞踏会ではダンスマスターの振付で踊られます。1867年1月初演の同曲には、ウィーンの諸劇場で評判となった劇作品のモチーフが散りばめられています。第1曲：A. ミュラー《エーゼルスハウト》、ヴェルディ《仮面舞踏会》、第2曲：スッペ《軽騎兵》、ヘルテル《フリックとフロック》、第3曲：《エーゼルスハウト》、第4曲：マイヤベーア《ディノラ》と《アフリカの女》、第5曲：J. ホップ《ドナウの乙女》、スッペ《古い箱》、第6曲：《ドナウの乙女》、オッフエンバック《青ひげ》。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈山から〉op.292

Johann Strauss Sohn: *Aus den Bergen. Walzer*, op.292

高貴で優雅な響きの演奏会用ワルツ。夏に仕事で毎年訪れるロシアのパパロフスクで、1864年に作曲。デビュー20年を祝う12月の演奏会でウィーン初演されました。出版譜は音楽批評家ハンスリックに献呈。ハンスリックは10年程前にヨハン2世の管弦楽法を「ヴァーグナー的」と非難した人物ですが、ひそかなワルツ・ファンだったといわれています。

フランツ・フォン・スッペ：オペレッタ《軽騎兵》序曲

Franz von Suppé: *Leichte Kavallerie. Overture*

スッペ(1819-95)は、ウィーン風のオペレッタを書き始めた作曲家として知られています。《軽騎兵》は1866年3月21日、ウィーンのカール劇場で初演。ハンガリー風音楽を用いた、最初のウィーン・オペレッタといえます。いまでは軽快な序曲のみが知られています。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈天体の音楽〉op.235

Josef Strauss: *Sphärenklänge. Walzer, op.235*

1868年1月21日、ゾフィーエンザールで開催された医者者の舞踏会で初演されました。タイトルが祝祭にそぐわないとみなされましたが、ヨーゼフの代表作となりました。古代ギリシア時代の音楽理論では、音楽の調和（ハルモニア）は宇宙の調和と同じと考えられていましたが、この曲を聴くと崇高な世界に導かれるようです。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈糸を紡ぐ女〉op.192

Josef Strauss: *Die Spinnerin. Polka française, op.192*

1866年謝肉祭にフォルクスガルテンで初演。コトコト回る糸車がリズムカルに描写されています。有名な〈小さな水車〉op.57と、双璧をなすヨーゼフのポルカ・フランセーズですが、近年はあまり演奏されませんでした。シュトラウス楽団がしばしば演奏した、ヴァーグナーの〈糸紡ぎの合唱〉（《さまよえるオランダ人》）を手本にしたといわれています。

第二部

リヒャルト・ヴァーグナー：オペラ《ローエングリン》第3幕への前奏曲

Richard Wagner: *Lohengrin. Vorspiel zum 3. Aufzug*

同オペラは1850年8月28日にワイマール宮廷歌劇場で初演されました。指揮はフランツ・リスト。夢想家のバイエルン国王ルートヴィヒに好まれました。ウィーン初演は58年8月。第3幕の前奏曲は壮麗な音楽で、オペラでは有名な〈婚礼の合唱〉へと続きます。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：ポルカ・マズルカ〈二人きりで〉op.15

Josef Hellmesberger: *Unter vier Augen. Polka mazur, op.15*

マーラーの後任としてウィーンフィルの指揮者(1901~03)を務めたヘルメスベルガー(1855-1907)は、20歳で父の四重奏団に加わり、1878年ウィーン宮廷歌劇場管弦楽団のヴァイオリン奏者になります。同曲は77年頃の若い時代の作品。ポルカ・マズルカは、3拍子のマズルカにポルカのステップを組み合わせたダンスです。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈宵の明星の軌道〉op.279

Josef Strauss: *Hesperus-Bahnen. Walzer, op.279*

ヨーゼフ最後の傑作。1870年4月にウィーン芸術家協会「ヘスペルス」の舞踏会で初演。ヘスペルスは「宵の明星」の意。同舞踏会は、1月に開場したばかりのウィーン楽友協会黄金ホールで開かれる予定でしたが、火事で数ヶ月延期されました。4月に優雅で遠大なワルツは大喝采を得ました。それから3ヶ月後、ヨーゼフは事故が原因で世を去ります。

ヨーゼフ・シュトラウス：〈ガロパン・ポルカ（使い走りのポルカ）〉op.237

Josef Strauss: *Galoppin. Pokla (schnell), op.237*

多くのウィーンっ子が、証券取引所に興味を示す時代がありました。その頃、取引所に通信技術がまだなかったため、伝令役として「ガロパン」と呼ばれる「使い走り」が大活躍しました。この曲の初演は1868年。すでにガロパンは過去の風物詩でしたが、彼らが忙しく動きまわる姿がポルカ・シュネルで表現されました。

ヨーゼフ・ランナー：〈シュタイアー舞曲〉 op.165

Joseph Lanner: *Steyrische Tänze*. op.165

ピアノを習ったことのある人にとって、「シュタイター舞曲」は、ブルクミュラーの練習曲で馴染みがあると思います。この舞曲は3拍子の民俗舞踊で、ワルツの祖である「レントラー」の一種。農民によって踊られました。ランナーはヨハン・シュトラウス1世とともにワルツ隆盛時代を牽引した作曲家。同曲はディヴェルティスマン《芸術の力》(1841年1月ケルトナートーア劇場初演)の1曲。3人のダンサーによって舞台上で踊られました。

ヨハン・シュトラウス2世：〈メロディー・カドリュー〉 op.112

Johann Strauss Sohn: *Melodien-Quadrille*. op.112

ウィーンではヴァーグナー以上に叩かれたヴェルディが、《リゴレット》(1852年5月12日ウィーン初演)でようやく賞賛を得ます。批評家はこの時もヴェルディを酷評しますが、皇帝フランツ・ヨーゼフとヨハン・シュトラウスはこのイタリア人作曲家を支持しました。同カドリューには《リゴレット》(第1,4曲)だけでなく、不評だった以前の作品、《エルナーニ》(第3,4,6曲)と《マクベス》(第2,3,5,6曲)のメロディーも引用されています。

ジュゼッペ・ヴェルディ：オペラ《ドン・カルロ》第3幕からバレエ音楽

Giuseppe Verdi: *Ballettmusik aus dem 3. Akt von "Don Carlo"*.

パリ・オペラ座からの依頼作《ドン・カルロ》は、パリ万博の1867年に初演されました。こんにちではイタリア語上演が多いのですが、2004年ウィーン国立歌劇場がコンヴィチュニーの演出でフランス語版を復活上演。それ以来、同劇場では仏語版と伊語版の両方が上演されています。バレエ音楽はグランド・オペラの形式を踏襲する仏語版で演奏されます。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈シトロンの花咲く国〉 op.364

Johann Strauss Sohn: *Wo die Citronen blüh'n*. Walzer, op.364

1874年《こうもり》で大成功を収めたヨハン2世は、翌5月にJ.ランゲンバッハ楽団とイタリア演奏旅行に出かけます。同曲はこの旅行用に作曲されました。タイトルは、ゲーテによる『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の有名な「ミニョン」の詩に由来します。

ヨハン・シュトラウス1世：〈エルンストの思い出、またはヴェネツィアの謝肉祭〉 op.126

Johann Strauss Vater: *Erinnerungen an Ernst oder Der Carneval in Venedig*. op.126

ヴァイオリンの名手、エルンスト作曲の〈ヴェネツィアの謝肉祭〉 op.18に基づく変奏曲。原曲がすでに民謡〈私のママ〉による変奏曲であり、1世の曲も変奏曲のスタイルで書かれています。楽器紹介さながらに、さまざまな楽器が入れ替わりでテーマを奏します。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈おしゃべりな子供〉 op.245

Josef Strauss: *Plappermäulchen*. Polka schnell, op.245

1868年4月初演。「音楽の冗談」という副題が付けられています。同じ副題が与えられた兄の作品〈常動曲〉 op.257と同様、この曲には終止がなく、際限なく演奏が繰り返される「常動曲」のスタイルで書かれています。タイトルは10歳になるヨーゼフの一人娘カローリーネを暗示しています。ウィーンフィルの演奏によって有名になりました。

* ヨハン・シュトラウス2世の作品タイトルについては、日本ヨハン・シュトラウス協会『ヨハン・シュトラウス2世作品目録』(2006)に従っています。